

のぞいてみよう！ せんだいの歴史

ゆかりの絵画編

竹図屏風の画技と文字

仙台市博物館 学芸企画室 佐々木徹

第10回

絵師の狩野左京

竹図屏風は、仙台城本丸大広間のうち、虎の間の障壁画の一部であったと推定される作品です。その障壁画には、竹林で憩う虎の姿もあつたとされます。画面の左右両端には襖の引手跡が見え、襖を屏風に仕立て直したものとわかります。この作品を手掛けた絵師は、狩野（佐久間）左京です。左京は、仙台藩初代藩主伊達政宗に登用された武家出身の絵師でした。桃山時代に畿内で活躍した狩野派絵師の様式を受け継ぎ、仙台城や大崎八幡宮、瑞巖寺などの仙台藩草創期の障壁画を手掛けました。

力強く繊細な筆遣い

一見、シンプルな図柄ですが、そこには絵師の高い技量が示されています。まず注目されるのは、稗（竹の幹）や葉の輪郭にうかがえる筆の力強さです。太めの墨線にそれが表現されています。

それでいて、密集した葉は重なり具合を意識しながら一枚一枚を丁寧に配し、かつ細かい葉脈までもが繊細に描き込まれています。

下地に記された「ハ」と「六」

金箔地に緑が映える竹の彩色には、絵の具の剥けてしまった部分が所々に見えます。そして興味深いことに、あらわとなつた下地の部分には、カタカナの「ハ」と漢字の「六」の文字があらこちらに確認されるのです。

「ハ」は葉を表すとされ、交錯する葉の墨線の着色部分を指示した文字と考えられています。一方「六」は緑青を表すとされ、茂った葉に見える隠れる部分への着色を指示していると考えられています。

桃山時代の狩野派の絵師たちは、織田信長や豊臣秀吉らによる相次ぐ築城を受けて、城内を飾る膨大な量の障壁画を制作していました。彼らは、多くの弟子たちを動員して制作する分業体制を採り、そうした状況に対応していました。

慶長一五年（一六一〇）に完成をみた仙台城本丸大広間もまた、約430畳にも及ぶ広大な空間に多くの障壁画が求められました。これらの文字は、狩野左京の指揮の

下、分業体制でその要望に応えていった痕跡とみられるのです。

シンプルな絵画であつても、じっくりとじかに作品を観察することで、その背後に潜む画技や絵師集団の制作過程に迫ることもできるのです。

今回紹介した作品の画像は、仙台市博物館ホームページの「収蔵資料データベース」(二次元コード)からご覧いただけます。



竹図屏風 慶長15年(1610) 仙台市博物館蔵 ※○印=襖の引手跡



力強い墨線と細かい葉脈



複数みえる「ハ」と「六」の文字

新収蔵品展

2017-2024

New Acquisitions : 2017-2024

3月22日土~5月11日日

資料(左から):
朝雲舟図 熊耳耕年筆(扇面貼交屏風のうち)、
宮城県指定文化財 薙刀 銘「国包」(部分)
すべて仙台市博物館蔵

10万点!!
おかげさまで

くわしくは、博物館ホームページをご覧ください。

「2025年 春の常設展」は、6月15日(日)まで開催中!

【開館時間】9:00~16:45 (入館は16:15まで)
【休 館 日】毎週月曜日(5/5は開館)、5/7(水)
〒980-0862 仙台市青葉区川内26番地(仙台城三の丸跡) TEL:022-225-3074

▶ 博物館ホームページ [仙台市博物館](#) 検索

▶ 博物館X(旧ツイッター) @sendai_shihaku